

## 第 5 回（仮称）やまと芸術文化ホール基本構想検討委員会 会議録

会議名 ( 審議会等の名称 )	第 5 回（仮称）やまと芸術文化ホール基本構想検討委員会	
開催日時	平成 2 0 年 3 月 2 1 日（金）午前 1 0 時 0 5 分～午後 1 2 時 1 0 分	
開催場所	市役所 5 階 第 6 会議室	
出席 状 況	検討委員	4 名（小川委員、倉田委員、西巻委員、古橋委員）
	アドバイザー	（株）シアターワークショップ 伊東氏ほか 2 名
	事務局 ( 担当課 )	3 名（企画政策課長ほか 2 名） 企画部 企画政策課 総合政策担当 （内線 5 3 0 4）
	傍聴人数	2 名
<p>1．会議次第</p> <p>( 1 ) 提言書に関する議論</p> <p>( 2 ) その他</p> <p>2．議事要旨</p> <p>( 1 ) 提言書に関する議論</p> <p style="padding-left: 2em;">アドバイザーから「（仮称）やまと芸術文化ホール基本構想提言書（検討資料）（資料 1）」 「参考資料」について説明。文化施設の賑わいを創出する機能の参考事例をスライドにて説明。</p> <p style="padding-left: 2em;">本日欠席の（米屋）委員から意見として述べる予定だった内容について、事務局より説明。 質疑</p> <p style="padding-left: 2em;">委員長：（米屋）委員からのメールでもご指摘のとおり、滋賀県のびわ湖ホールの事業費削減が 話題になっていることにも関連するが、ホールの整備に際しては「生活の中で何故文化 が必要か」ということを理解してもらうことが必要となる。また、前回委員会でも説明 を受けた、市民アンケートの結果について、市民の方々から様々な反応があったと聞いて いる。最近では医師不足の解消や救急受け入れ体制の整備などが注目を集める中で、文 化施設を建設するのはいかなるものかというご意見があったと聞いている。そのあたり の理解を得られないと、文化施設建設にも理解を得られないかと思う。この点を踏まえ、 ご意見を頂きたい。</p> <p style="padding-left: 2em;">委 員：資料を見ると、1 ページ目の「芸術文化の重要性を知る」の項目の「人間の知の営みと しての文化にふれ…」という文章は「芸術文化」ではなく「文化」という表現になって いる。しかし、「知の営みとしての文化」という広い概念は、大和市の環境においては 違和感がある。ここは「芸術文化」で良いのではないか。</p> <p style="padding-left: 2em;">委員長：同様に、「1．芸術文化ホールの必要性」の項目に書かれている「文化」はすべて「芸 術文化」に置き換えてもよいのではないか。大きな政策として、大和市における文化振 興計画で「文化の必要性」を他の政策要素と同様に、明確に位置づけることが必要であ る。その中で芸術文化活動を鑑賞や創造といった方法で市民自らが参画していくものと</p>		

して位置づけることで、より議論がしやすくなるのではないか。突然施設の話になると、どうしても拒否反応が出がちな傾向がみられる。

アドバイザー：こういった、「芸術は必要不可欠なものだ」という議論は、芸術文化を愛するものからすれば納得がいくが、一般的には必ずしも受け入れられない場合がある。劇作家・演出家の平田オリザさんはよく「劇場は病院と同じように必要」だとか、「人間の生死に関わる」とこういった施設の必要性を説明されているが、なかなか理解が得られないのが現状である。

委員：芸術文化の必要性に関しては、前回の議論の中で具体的な意見が出ていた。ベルリンやパリで失業率が高いときにも文化予算を減らさなかったことの意義や、ライフスタイルの中に位置づけられる文化や芸術ということを、この項目の中に具体的に触れていただくと、裏づけになるのではないか。

委員：「供給のためのインフラ」というだけでは、説明が不十分なのではないか。都市機能として芸術文化が必要だということが語られていて、その先に文化施設が必要だということになるのではないか。その論法は不可欠である。

委員長：事業計画と検討課題で触れられているが、こういった事業を誰が主体となって行うのかということを考えていく必要がある。そのときに、まず市民とプロという関係があり、更にその中間層が存在する中で、本施設が誰のためのものなのかということも含め、関係の明確化が求められる。前回具体的に上演団体とのフランチャイズやアーティスト・イン・レジデンスといった話題も出ているが、再度ご意見をいただけたらと思う。

委員：プロかアマかという問題より、館としてどうミッションを明確化するかということがまず最初にあるのではないか。それは事業計画に関わり、更に施設計画にフィードバックされるということではないか。施設の見学等を通して感じた範囲では、「地元のアーティストを育てる」という視点が事業に反映されているようである。本来、質だけでいえば、そのアーティストが市内在住・在勤なのかは関係がない。一市民を支援するという視点でその地域のアーティストを捉えるのかどうか問題としては大きい。地元だということに主眼を置いて、まだ芽が出ないアーティストを積極的に支援していくというようなコンセプトを最初から持つことと、芸術的な質を高めることに主眼を置いて、地域の芸術文化に対して館が積極的に参画していくということは大きな差がある。最近、ある自治体の文化会館でオーディションを行い、話題になっている。プロ・アマ問わず、公募でオーディションをし、合格者を登録制にし、仕事があれば自治体がアーティストに仕事を振り分けるというシステムのようなものである。プロ・アマを区別しないということは運営上は難しいが、可能性はあり、また単純な地元重視に比べて積極的な意味があると考えている。ただ、プロとアマの関係性や、アマの参加の仕方については、ボランティアのあり方と全て関わる問題である。運営計画を先行させ、館のコンセプトをきちんと作った上で考える必要がある。まずは、取り組むべき事業を明確にすることがプロに関する課題を解決すると思っている。

先ほどのスライドに関連してお話したい。先週パリとイタリアに行き、劇場の見学をしてきた。最近ではガルニエ（ガルニエ宮。パリ・オペラ座とも呼ばれる。パリ・国立オペラの公演会場の一つ。）ではバックステージツアーは見せないとのことだったが、内部の方と連絡を取り合って、見せていただいた。一般的な劇場ツアーは舞台には乗せないという方針であった。逆に、バステューユ（オペラ・バステューユ。パリ・国立オペラの公演会場の一つ。）は一般的なツアーでも、裏を全て見せてくれる。たまたま、演目

の入れ替え日に見学に行ったが、仕込みの真っ最中に舞台を見せてくれた。しかしながら、バスティーユは周辺環境が良くないため、当初はロビーを開けていたが現在は完全に閉めるようになったようである。公演中も始まったらすぐ閉めるようにしている。このように、文化施設の建設に当たっては、根本的にその土地の持っている性格を把握しておかなければ、せっかく建てても、施設が理想的に活用されない場合もある。キャンティーネ(楽屋食堂)については、ガルニエとバスティーユを両方見たが、ガルニエにはみんなが集まって食事をできる場所がないため、別の場所で食べているようだった。バスティーユは広いスペースが確保されていた。いずれも、一般の人には入れない。

委員：ガルニエのバックステージはどこまで公開しているのか。

委員：客席周り、ホワイエ、図書館は見られるが、舞台の上には一般の人は乗せていない。バックステージも見せていない。危険であるとか、文化財であるとか、意味があるのかと思う。たまたま何もやってないときに運よく見せてくれたという例はあるようだ。申し込んでも、どこまで見られるかはそのときの運次第らしい。同じ値段を払って客席までしか入れないこともあるようだ。

委員：オープンにしているかどうかについて、セキュリティの問題は大きい。バスティーユは以前自由に入れた。道からクローズしているということか。

委員：そうしている。開演のときも、出入りはドア1つに限定している。スーベニアショップは別ルートから入ることが出来る。

委員：オープン化とセキュリティの問題。私が勤める劇場にもプロムナードと呼ばれるオープンなスペースがある。これは公開空地であり、一般市民が出入りしている。夏になると、冷房が利いているという理由で通り抜ける人は多い。また、タクシー乗り場にタクシーを止めて、運転手がトイレを利用する場合などもある。そういった利用をされることは構わないが、公的な機関だと管理が複雑になる場合がある。館が独自に警備会社と契約をして24時間体制でセキュリティをしている。23時で閉め、市民も入れない。しかし、公開空地であるため、24時間オープンにしろと言われる場合がある。そうするとホームレス対策など、様々な問題も出てくるため、環境の問題とあいまって、線引きが難しい。

プロとアマの話については、プロの定義が何かという問題がある。この場合で言えば、インストラクションにおけるプロフェSSIONナルであり、育成や指導が出来るという意味がまずひとつある。アーティストという面でのプロフェSSIONナルというのは、独自性が評価されるものであり、多数のアマチュアを育てる・教育する・指導することに向いているとは限らない。舞台芸術においても、ヨーロッパではアカデミーや演劇学校で育った、才能のある人がある限られたプロやスターになっていく。その他の人がどうなっていくかという、個性的な凄い芸術家にはならなかったが、実力があり、ある資格やステイタスを持って教師・インストラクターとして、次の世代に教えていく。そういう人達の底辺が広いと、また凄い人が育っていく。単純に、凄いからプロだといって、一人に全てを期待していくと、方向を誤ってしまう。大和の場合にどうなのかを具体的に考えていくべき。インストラクターの必要性の有無や、アートコンシェルジュの話題が前回出たが、それがどういう人達で、どういうステイタスがあるのかということをやより具体的に検討すべきではないか。

委員：施設の賑わいについて言えば、ホールという施設の宿命で、一般に開館している時間より、中で創造・創作のために使っている時間の方が遥かに長い。そのため放っておくと

外からはいつも閉じられていて利用されていないように錯覚されがちである。しかし開館していないからと言って、何もしていないわけではない。“ そうした閉じられた空間 ”が中核にあるということを認識した上で、別途、賑わいをもたらすための工夫が必要で求められている。スライドで紹介された茅野の事例が興味深い、子どものための施設と複合させ、子どもの頃から、いかにアートに触れるかという道標があるというつなぎ方は、工夫されていると感じた。スライドで見たような事例やバックステージツアーなど、閉じているところをどう見せていくかは、賑わい作りの仕掛けとして重要である。もともと、そういった場としての宿命があることを認識した上で、茅野のような事例を踏まえて積極的に事業を展開していこう、ということが提言書に謳われることが重要である。

次に、プロとアマの話題について、ここで議論しなければならないのは、本施設が一部の地域の活動家のためだけの施設ではいけないということである。そういった方を締め出すということではなく、その人達のためだけに閉じられた空間や施設ではないということを知ってもらうことが重要である。オーストリアのシュテファン・ツヴァイク(作家・評論家)は“ 芸術都市としてウィーンが凄かったのは、優れたアーティストを輩出したからではなく、聴衆が目利きであったからだ。ウィーンの人達はいい加減だが、アートには審美眼を持っていて、いい加減なものを許さない。それが、ウィーンという芸術都市を作った ”と語っている。何故、皆がウィーンを芸術の殿堂として憧れたかといえば、そういう聴衆がいたからである。一部の優れたアーティストがいたからではなく、ウィーンの市民、市民の高い見識眼があったからだと言える。「やまとに住む誇り」のひとつに、“ センスあふれる市民が住み、“ 文化度が高い ” とか “ おしゃれな町 ” といった視点で評価をされるということもあっていい。それは素晴らしいことだ。だから芸術文化が都市機能として市民生活の中で重要であり、文化施設が必要だと構想で謳えないだろうか。そしてまず市民のセンスを磨く場として、劇場・ホールが必要だということを述べるべきである。そうすると、事業としては具体的には市民の発表の場としての事業をどのくらいどのように実施するか、聴衆としての市民の目でアーティストの評価が広く変わっていくような事業をどのくらい実施するか、子供が育っていくような事業をどのくらい実施するかということが並列して事業計画になっていく。表現者として優れたアーティストの参画の機会があるとか、アートコンシェルジェの中核を担うであろう教育者・インストラクターとしてのアーティストがどう参画するか、市民としてアートに活発に取り組む市民がどう参画するか。そういうことでいいのではないか。プロとアマに拘ると歪曲して捉えられがちなので、先に述べたようなバランスの事業計画が考えられて、そのための施設がつくられるということを謳っていくということではいかか。

委員：施設のオープンとクローズの話題について、先ほど見せていただいたスライドの中に、シエナの広場があった。人が集まる傾向として、日なたかどうかという要素もある。文化施設を考えるにあたり、全体のイメージがオープン化されていて広いということと、その中で行われていることのオープンさを考えなければならないし、広場の日なたの話をしたが、反対に夜のことも考えなければならない。夜の催し物に人が集まる場合、施設のオープン化とはどのようなものかも考えなければならない。

事業については、中長期計画や事業計画があり、それに基づいて考えていくことが出来ない、先ほど話題になったびわ湖ホールのような問題に直面することになってしまう。これは大きなテーマだと考えている。長期的に考えなければ、そのようなことが起

きてしまうが、「起こってしまった」では済まされない。びわ湖ホールについて、最初は県議会で半年休館すべきという意見が出されたと聞いている。それを聞いたときに、多くの専門家が、びわ湖ホールは劇場としての機能を失ってしまうと考えた。半年ストップして、半年後にまた始めるというのは非常に困難である。新しくオープンさせるのとは別の困難さがある。ソフト的にも、ハード的にも同様である。舞台機構も半年館全く動かさなかったら、ダメになってしまう。再度メンテナンスをして動くようにするのは、またつくるのと同じことになりかねない。大変な労力が必要とされ、それはコストにも跳ね返ってくる。「長期的」ということは、「継続性」ということであり、これらは不可分なものである。一過性のことに何十億も使うわけにはいかない。長期計画、継続性ということとは、言い換えれば、事業計画として何をやっていくかであり、同時に大和市の文化政策がどうあるべきかということである。

アドバザ - : 継続的な事業予算の確保という点では、水戸芸術館は、開館にあたり市の総予算の1%を水戸芸術館の事業費に充てることが議会を通してオーソライズされている。条例で保障されているものではないので、多少上下もあるが、現在もキープされていると聞いている。

委員長 : 日本ではこういう建物を「ハコモノ」としてひと括りにしがちだが、それは同時に政治的なものの対象にされがちだということでもある。入念に計画して、積み上げてきたものが、政治的なものの対象になることで100%ひっくり返ったりしてしまう。施設を維持する中で起きることもあるが、最近多いのは、完全に設計が終わって、事業をこれから発注するというときに選挙があり、市長が変わって反故となった例がある。政治的な立場は良く分かるが、政治を超えて理解されなければならないこともある。条例も政治的な対象にはなるが、ある程度、条例のようなきちんとした形で継続性を担保することがそろそろ必要なのではないか。どこでもいえることだが、政策的な継続性というのは、首長の交代のタームで途切れてしまう。しかし、文化は7~8年といったタームで区切られるべきではない。長期計画を立てると同時に、広く市民的なコンセンサスを得なければならない。先ほど話題になったように、病院などとの優先順位の問題が必ず出てきて、「文化は余裕のあるときにやればよい」ということになってしまう風潮を、今回の施設づくりを通して、変えていかなければならない。また、市民の文化への関わり方に差があるように感じる。プロとアマという議論については、もう少しきめ細かく、違いを説明できるとよい。施設の賑わいについては、文化への関心度に幅がある様々な市民がいて、ある時間の中で、自然と芸術文化への距離が埋まっていくような仕掛けが必要である。文化をあえて意識しなくても、自然と足を運ぶ場になっていて、かつ日常生活の中に催しが浸透していくことが大事なのではないか。まちづくりという視点から施設を見ていくと、ホールとのインターフェース(中間をつなぐもの)が必要だと考えている。海外のホールの事例を見ても、1階レベルにはホールと関係ない施設が入っている場合がある。都市の中において広場的な機能を持っていると言える。その広場部分に活動や催し物がしみ出して、子どもや市民がそこに足を運ぶような仕掛けなどがあり、自然とホールとの距離が縮まっていく。そういった戦略が必要である。馴染んでいる人にとっては日常的な存在でも、それ以外の人にとってはハードルの高いこともある。こういった戦略が事業に反映されると良いと個人的には思っている。立地にもよるが、レストランやカフェが入っているという例が多い。海外だと、本屋さんが併設されているなど、工夫がなされている。

委員：米屋委員がメールで指摘されていた、「生涯学習センターの老朽化対策」という話題が気になっている。「大和市に見合った等身大の施設」という議論がなされてきていたが、それを受けて、極端なことを言えば病院の中にホールがあったらどうだろうかと考えた。子供の頃に長期入院していたときに、毎日チャペルに遊びに行くのを楽しみにしていた。そういう経験から、毎日なんとなく行ける場が必要だと感じている。その中で、生涯学習センターの老朽化対策と、ホールの新築の問題をどう繋げるかは重要な問題である。新しいホールを作るならば、等身大であれ質の良いものをつくる必要があると考えている。大和市のステイタスや文化度を表すという点では、建築的にも誇りになり得るものが必要である。文化施設全体で考えれば、古い施設をネットワーク的に位置づけて、大和市の文化行政の中で全体的な姿を形作ることが必要である。その中で本施設をどう位置づけて、更にはどう予算化していくか、そしてそれが可能なかを考えていかなければならない。そのあたりは触れずには置けない問題である。

委員：質問がある。以前大和市内の施設を見せていただき、プライベートな音楽ホールやスタジオや能楽堂についてのお話を伺ったが、それらのキャパシティや、どういう人達が使っていて、内容としてどのようなことが行われているかといった情報を含めたマップを示していただくことは可能か。中身を含めた文化施設の有り様を知る資料がもう少し欲しい。全体を把握した上で、どのようなものにしていくかを考えたい。

委員：候補地をどう考えるかということではなく、市内の文化活動が見えるようなマップを頂きたい。

委員長：確かに、芸術文化振興計画の中で、生涯学習的な活動と本施設で行われる活動をどう整理していくかに関わる問題である。それは、本施設と生涯学習センターの両者の必要性の理解を得るということでもある。新しい施設を何かの代替施設として捉えられるのではなく、全体の枠組みの中でのそれぞれの役割を考え、両者を整えるべきであり、それぞれのメンテナンスに予算が配分されていることが大切である。難しいが、重要なことである。

事務局：生涯学習センターホールのあり方については、当初の考え方と多少変わってきている。当初はリニューアルをしっかりと行い、中規模ホールの位置づけで機能し、芸文ホールとの機能分担を想定していた。市長の交代後にリニューアルを止め、最低限の補修にとどめたということで、考え方は少し変わってきている。しかしながら、どういう位置づけかを行政内部で確認したわけではないので、委員の皆さんのご意見を参考に検討をさせていただきたい。

アドバイザー：高座渋谷は渋谷学習センターに併設する小さなホールで、学習センターと同様に公民館法の位置づけのものである。

事務局：高座渋谷駅前複合施設のホールは、渋谷学習センターの中に位置づけられており、公民館法に基づく地域の中の学習施設である。また、生涯学習センターはそれらの各地区の学習センターの中核施設である。

委員：その整理が実は出来ていないように感じる。次に出来る施設がそれらの機能を貰い受けたものではないことを明らかにした上で、位置づける必要がある。

委員長：地域レベルである役割を果たしていくのは学習センターで、それが維持されていかなければならない。その辺の整理が必要。

委員：新しい施設が出来たら、アマチュアの人でも当然新しい施設を使いたがるし、使ってもらわなければ困る。

委員長：賑わいを生み出す施設機能という話題があったが、その中に取り組むべき事業を検討する必要がある。事業のイメージなくしては施設計画も検討しにくい。その点についてご意見があれば頂戴したい。前回はアーティスト・イン・レジデンスやフランチイズなど、少し具体的な議論があったが。

アドバイザー：私自身はＪリーグをイメージしている。例えば、アントラズというサッカークラブを中心に町全体が盛り上がっていて、地域とチームとの良い関係が築けている。それがスポーツにはできて、何故文化では出来ないのかと考えた。クラブチーム的な文化運動体のようなものが地域に根付いても良いのではないだろうか。頂点が日本を代表するプロだからこそ、子供たちも参加する喜びを味わうことが出来る。子供たち自身がトッププロに習うわけではないが、その中間に様々なタイプのプロがいて、指導を受けられ、全員が組織のメンバーの一員としての誇りを持つことが出来る。文化でも同じことができれば、理想的だと考えた。そのときに重要なのは、現状に満足せず更に一步進みたいという気持ちを持つことと、そこにはプロが必要ということの２点である。公民館での楽しみ方と、本施設で行う事業とは違い、本施設では“その先”に進む事業に取り組む必要があり、それが事業のメインになると考えている。それがこの提言書案でいう「ミドルアップ」だと考えている。

委員長：そこにより良きサポーターがいることも重要である。

委員：文化で同じ事を実現するのが難しい理由は、目標が明確ではないことだと思う。スポーツの場合は「優勝」という目標が明確である。目標が明確で、かつ一つしかないとなんが思っている、ということに尽きる。“好き嫌い”といった論議が入ってくるとそれが難しくなる。

アドバイザー：そういう目標は作れないだろうか。

委員：ドイツ型のクラブチームのあり方を目指したのが日本のＪリーグである。底辺から積み上げていくということで、構造としては理解できる。サッカーで言うと、原っぱでボールを蹴り始めた…というような状況があることが大切ではないか。「広場」ということと共通するかもしれないが、すぐに触れられる創造的な何かがあって、そこに導いて指導できるインストラクターがいて、ダンスはこうだよとか、楽器はこうだよということを教えられる場が手軽にあれば素晴らしい。

委員長：スポーツと関連して言えば、クラブ活動は学校単位で行われていたが、Ｊリーグやリトルリーグが学校の枠を超えて活動することで違いが出てきたのは確かである。本施設がそういう場になりうるかどうかということではないか。

アドバイザー：学校演劇も盛んになってきているが、女子が多かったりして、思うように活動が出来ないことが多い。また、学校をまたがるクラブ活動の問題点として指摘されたのが、内申書との関連である。部活動をしているかどうか内申書に影響する。

委員：アメリカなどでも、芸術系の時間が減らされ、日本でも音楽や美術が選択性になってきている。それを行政が支援していくのは必要なことではないか。市民活動としての教育を公的なものが支援していくことは全然おかしなことではない。そしてそれが、活動として認知されることが必要である。内申書にも「あのホールのダンスクラブに入っていました」ということが書かれて、「一生懸命やっていたんだな」と認知されることは、芸術系の授業時間が減らされている中で非常に意味がある。

委員：ドイツではスポーツや芸術活動は学校ではなく、地域コミュニティがはぐくんでいくものだという意識が強く、実際にそのように行われている。スポーツもアートももともと、

一世代だけが固まって、その閉じられた世代の中で作り上げていくものではない。教えるとか教えられるとか、一緒に何かを作っていくという過程で、世代を超えて人と人が接し、対話し伝承するということがアマチュアがアートやスポーツをやるもう一つの大きな意義であるという認識がある。これらのことについて学校は最低限のかかわりで良くて、地域の中でスポーツやアートに取り組んでいる。一方で、日本の演劇活動などもそうだが、上演側も学生演劇を主体に出てきていて、観客も含めてひとつの同じ世代で構成されていて、観客が社会人になると雲散霧消してしまうという脆弱さがあった。重層化を担う意味でも、アートは地域で作って、地域で伝えていく財産だという視点が必要である。アドバイザーの提案のようなことを実現する場としての劇場・ホールのあり方を、これまでに文化庁にも様々な形で訴えてきたが、それがシステムとして実現しない中で、基礎自治体が文化施設をつくる中でそれに取り組むことは新しいことで、意義がある。

委員長：芸術文化の重要性をどう投げかけていくかというときに、人を育てるといったテーマを関連付けていくと理解されやすい。全部がプロになるわけではないとしても、そこから優れた人材が輩出されていくということもある。学校教育の枠組みの中では、指導者などに関しても無理がある。大和市全体の中で文化芸術に取り組める環境を整えることを、施設の事業に位置づけていくことが大事ではないか。それが最終的には大和市の社会的環境としての特徴になり、都市の魅力に繋がれば素晴らしいのではないか。

アドバイザー：超一流の人の演奏会を聴いても、本当の凄さはなかなかわからない。ただ、日頃その人達がどうやって鍛えているかを知ることには、大きな意味がある。アーティスト・イン・レジデンスでその姿が見えている状況が素晴らしいのではないか。アーティストとしては見せたくないかもしれないが、是非取り組みたい事業である。これは例えば、川崎市が新百合ヶ丘のまち全体をアートセンターとして位置づける中で、昭和音大が果たす役割に近いかもしれない。

委員：先日、中部地区の大きなホールを仕事で訪れたが、とても賑わっていた。館内のどこで何をやっているかを表示するなど、工夫をしていた。演劇などの文化がもともと根付いていたわけではないので、そこは事業で努力をした。事業を通して、初めての人達と演劇をつくる作業を何年か重ねたところ、演劇活動に熱中する人がでてきて、そこから劇団が生まれている。稽古場はその稽古に使われていて、やがて小ホールで発表会をするという計画がある。一方、音楽練習室はロックバンドの練習で埋まっている。小さくても仕掛けを作れば人が集まってくる。良い指導が出来れば人が育っていく。そして、その発表の場と、プロの鑑賞の場としてのホールとをどう考えるかが次の課題である。とにかく、ホールを蹴る場所があれば、そこに人は集うと強く感じた。

委員：いわゆる「市民講座」などが、本当に機能しているのかと疑問に思うことがあるが、実際のところ、市民活動を継続している人達は、ある講座をきっかけに、活動を継続していることとかがある。仕掛けとしては必要と言える。

委員長：講座を受講すると、終了後にそのメンバーでグループを作って継続したりすることもある。

委員：そういった活動に途中から入るのは、逆に垣根が高く感じられる。初心者から始めてうまくなってきたときに、本当の初心者が入ってくることを好まない傾向もある。そのため、様々なレベルのケアが必要になる。公共としてまいた種はのちもケアしていかなければならない。



委員：先ほど述べた施設で、ロビーの一角に展示が出来る場所があり、市民の描いた絵が掛けられていた。いわゆる展示室ではないが、良い印象を受けた。美術館や博物館のような展示室とは違い、そこは絵が掛けてあるだけだった。しかし、自分と同じ市民の人達が描いた絵を見るのは、それはそれで価値がある。ひとつの広場のファクターを持っている。図書スペースにはお年寄りが多く、それぞれ新聞や本を見ていて、ここもまた広場になりうると感じた。

委員長：必要とされている議論については深化したのではないか。他に今日話しておきたいことなどあるか。

委員：先ほどお願いした“文化マップ”の作成は可能か。

事務局：民間施設に関してどの程度の情報を盛り込めるかわからないが、可能な範囲で作成したい。

#### (4) その他

第6回目の日程を4月下旬で調整を行うことが了承された。

#### 3. 委員会資料

資料1「(仮称)やまと芸術文化ホール 基本構想提言書(検討資料)」

参考資料「施設計画の基本方針参考資料」